

第8話：弱音ハクの暴走

(1)

「 お袋お！どこいったんだよ。」

「 ハクヨさあん。」

二人は、一日中、探し回ったけれども、どこにいったのか、全く、見つからない。
しかたがなく、二人は、家に戻り、ランチをとって、テレビをつける。

「 速報です。笙野町の繁華街で、
謎の昏睡事件があったということです。」

「 理由は全くわからないということですが…。
現場に繋いで見ましょう。田中さん。聞こえますか？」

テレビ局のスタジオから場面が移り、繁華街の中で、現場検証を行っている
警察やひっきりなしに、救急車で運ばれる人々の様子が、映し出された。

その中で、田中と呼ばれた新人らしい女子アナが、とまどった様子でリポートを読み上げる。

「 はい、こちら、現場の田中です。
謎の昏睡事件の現場にきています。」

「 何か、わかりましたか？」

「 いいえ、何にも…」

というのと、その妙なる歌声が聞こえてきたのは、ほぼ同時だった。

「 この歌は！なんて、綺麗な…」

そういったきり、ふらふらと夢遊病のようにどこかへ、彼女は歩き出して
テレビには、砂嵐がかかった。どうやら、テレビ局のこのスタジオにいる
全員が、歌のとりこになったらしい。

「これは…！？」

「これって、いったい？」

二人は、顔を互いに合わせて頷きあうと、現場に向かった。
悲劇が待っていることもわからずに…。

(2)

「あはははははっ！」

ハクは、自分の歌に酔いしれる観衆を見て、自分に酔いしれる。
みんな、感動のあまり倒れてるじゃない。

そう思うと、黒い力がわいてきて、歌に輝きがでてくる。
彼女は、実のところ分かっていなかった。

今、彼女が歌っているのは、魔曲、第十九位。睡魔奏楽(ノート・ナイトメア)で、観衆が倒れているのは、魔曲が、生命力を奪っているからだということを、
悲しいことに気付けなかった。悲しいことに…。

ミクと唱太が、彼女の元にたどり着いたのは、ハクが、九千九百九十八人目の犠牲者を出したときだった。辺りには、倒れこんだ人々で覆い尽くされている、その中央に黒い翼をひろげた悪魔の歌姫がただ一人屹立している。その顔が二人をとらえたとき、唱太、そして、ミクは愕然とした、一日中、探していた母親がそこにいた。

「お、お袋…」

唱太のことを忘れてもしたように、ハクは彼をぼんやりと見つめて、妖艶な笑いを帰す。

「あら、次の観客が来たようね…」

「な、なに言ってんだよ。お袋…」

「さあ、私の歌に酔いしれなさい！」

「 おれだよ、唱太だよ。」

しかし、ハクは自分に酔って、唱太の言葉は届かない。やばい、攻撃がくる。

「 マスター！ 攻撃を！ 」

「 だめだ！ 母さんを傷つけちまう！ 」

絶体絶命の状況の中、唱太は…

《つづく》